
歓楽街

浅川太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歓楽街

【Nコード】

N5780Z

【作者名】

浅川太郎

【あらすじ】

子供の頃、歓楽街に近づくなと言われたが

（前書き）

冬休みも近づき、幼少だった頃を思い出して書きました。

小学生だった頃、冬休みが近づくと、同一町内の子らが集められ、高学年が音頭をとり、過ごし方の留意点などをまとめ、最後に復唱した。

僕が小2の時だった。

5年の女の子がリーダーとなり、《お父さん、お母さんの手伝いは嫌がらずにやりましょう》と、これは理解できたが、幾つ目かの《『歓楽街』には決して1人では行かないようにしましょう》とあり、歓楽街の意味がピンと来なかった。質問なんかはしない性格であった。

漠然と（長崎市内）浜の町までは行ってもいいが、思案橋から先は駄目なんだろうなあと考えた。

そんな子供の頃の僕を誉めてあげたい。

でも僕は思案橋の近くの横丁を少しだけ知っていた。

ビートたけしがペンキ屋の倅せがれであるのは有名だが、僕の家も似たようなもので、僕は家に来てた職人さんのマーコ兄ちゃんと、タツ兄ちゃんに育てられた。

タツ兄ちゃんは僕を連れてパチンコ屋にも行つたし、赤い口紅を塗った《怖い姉ちゃん》達のいるところにも行った。

家で夕飯を食べて帰る毎日であったタツ兄ちゃんは、おそらく、夕暮れに僕を連れて、当日の「女のローテーション」を確認してから

帰っていたのであろう。

子供には、どぎつい赤い口紅の女の人、生肉を食った後のような印象があつて怖かつた。

怖かつたけど、彼女達は子供の僕が大好きだつたようだ。

当時の彼女達の格好は、1960年の前後であり、ミニスカートの考案されるには十年余りはやく、ボディコンの服なんて一着もない頃である。

漫才の《いくよ・くるよ》のくるよちゃんがよく着てる、島田紳助がサーカスの象使いが着てると言つたあんな服、それも信号よろしく赤青黄の原色であつた。

とにかく僕は食べられるかもしれないと怖かつた。

であるから5年生の女の子が、歓楽街に1人で行かないように注意するのも、もつともなことだと思つた。

二十歳になつてからこつち、僕の作品で判るように、僕は人一倍歓楽街には通いつめたほうだろう。

世の中にデフレという言葉があると知らない時分、ほとんど毎晩通つてた頃もあつた。

そして判つたことがある。

《歓楽街》に《歓楽》は実は、ほとんどない。

こちらの財布が陥落してしまうことは、ま、ま、ある。

（後書き）

最後のシェアが言いたかったわけでもないのですが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5780z/>

歓楽街

2011年12月19日10時50分発行